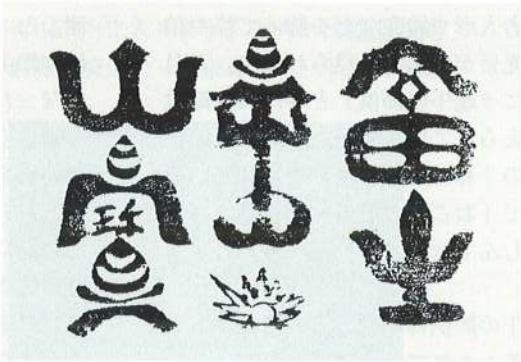
FUJIYOSHIDA MUSEUM
OF LOCAL HISTORY NEWS

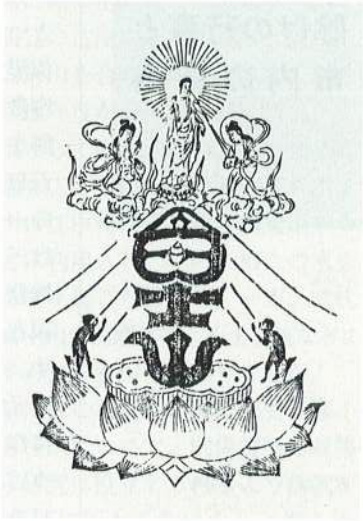
富士吉田市 歴史民俗博物館だより

7
1996.9.30

資料紹介
『富士山の絵札』



【牛玉宝印】



【富士山牛玉】

平成8年6月30日から8月26日までの約2ヶ月間、企画展として『富士山の絵札－牛玉と御影を中心に』を開催しました。

富士山は古来から山岳信仰の対象とされ、とりわけ江戸時代には多くの信仰登山者で賑わった山として知られています。しかしその信仰の歴史は複雑で、富士山の本尊にしても浅間大神・大日如来・浅間大菩薩・木花開耶姫命と、さまざまな神仏が祀られてきました。こうした富士山の信仰の実態を現在の私たちが理解することは容易ではありません。

富士山の信仰を視覚的に理解するためのものとして、絵札は絶好の資料といえるでしょう。絵札というのは木版で紙に摺られた神仏や信仰対象の描かれている札のことで、一般に「おふだ」、あるいは牛玉や御影などとも呼ばれ、江戸時代には御師等によって大量に頒布されていました。絵札は富士山の信仰を凝縮したものであり、そこには多くのことが語られています。富士山信仰の変遷やその時々の信仰の実態は、絵札を通しても知ることができるのです。

ここでは企画展のなかから「牛玉宝印」と「富士山牛玉」について簡単に紹介します。「牛玉宝印」とは護符（守札）の一種です。用法としては家の戸口に貼ったり、水田の水口に立てたりして招福除災を祈るほか、起請文の料紙にも用いられました。起請文とは、これから実行することについて神仏に誓約した文書のことです。富士山の牛玉宝印がいつ頃から始まったのか明らかではありません。しかし、天文17年(1548)の「江戸忠通誓紙」や天正13年(1585)の「中小路又衛門以下連署起請文」に富士山の牛玉宝印が用いられていることから、戦国時代にはすでに広く頒布されていたものと思われます。

「富士山牛玉」は富士山頂に来迎する阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊を描いたものです。これにより富士山信仰において山頂は「あの世」であり、阿弥陀の極楽浄土であるとする思想をうかがうことができます。「富士山牛玉」は中世に発した「牛玉宝印」をもとに近世になって発展したものであると考えられますが、江戸末期になると阿弥陀三尊が木花開耶姫命を主神とする三神の像に置き換えられた牛玉が現われます。これは江戸後期以降徐々に進展する御師の思想の神道化の影響によるものですが、この三神の牛玉は富士山牛玉の型式に則してはいるものの、そこには富士山牛玉の有する本来的な性格である三尊来迎の思想はすでに消え失せ、富士山牛玉の本質とはかけ離れたものとなっていることがわかります。

▼企画展から

「端午の節供」

除けの行事と市内の習俗

五月五日は「こどもの日」として祝日のひとつとなっています。この日は五月晴れの空似黒や緋色の鯉のぼりが泳いでいる風景や、座敷には武者人形や鎧兜などを飾って粽や柏餅を食べる光景が全国的に見られます。五月五日は一般に「端午の節供」と呼ばれ五節供の一つに数えられています。この端午の節供は三月三日の「おんなの節供」とされている雛祭に対して「おことの節供」とも呼ばれ、現在でも親しんで行われている行事と言えます。

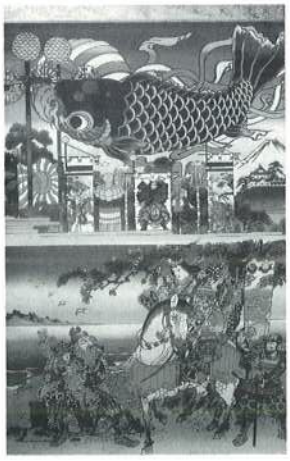
元来、端午の節供は中国の古い習俗がもとになっているとされています。「端午」という言葉の意味は本来、五月の一番始めの午の日を指すものでした。それが次第に奇数を縁起の良い数とし、月と日の数が一致する日に意味があると考え、次第に五月五日に固定され日本に輸入されたものです。中国の古い年中行事について書かれた記録によると、端午には野外に出て薬草を摘んだり、草の根の長さを競いあって遊ぶことがありました。また、蓬で作った人形を門口に掛けたり、蘭を入れた湯に入ったり、菖蒲を浸した酒を飲むなど病気や災厄を防ぐことを目的として行われていました。日本でも菖蒲を身体につけたり、家の屋根や軒に掛けるなどの他、菖蒲を入れた湯に入ったりと中国の古俗に共通した内容の習俗がみられます。

端午の節供が行われる五月には、全国各地で関連した様々な習俗がみられます。中世に入り武家の時代になってからは流鏑馬などが行われ、子供たちの間にも「印地打」「石合戦」などの勇ましい習俗が広まりました。このように勇壮な習俗が多く重なることと「菖蒲」と「尚武」の音が似ているため、次第に桃の節供と対照的な男児の節供とされるようになったといわれています。

富士吉田市を中心としたこの地域では端午の節供を「おとこの節供」と呼び、一月遅れの六月五日に行うのが一般的ですが、近年では普通に五月五日に祝う家も増えてきました。庭にはのぼり竿を立て鯉のぼりや吹流しを取り付けます。現在では外飾りといえば鯉のぼりが一般的ですが、昔は武者絵などを描いた旗幟が飾られていました。その一方で座敷には武者人形や鎧兜を飾り、他に鍾馗・神武天皇・神功皇后・金太郎などの人形も一緒に飾ります。これらの人形類は嫁の親や親類から贈られたものです。長男の節供には親類を家に招き、特に盛大にお祝いしました。

端午の節供にみられる習俗には菖蒲を用いたのものが多いようです。家の入口付近の屋根や軒に菖蒲や蓬を束ねて差します。これは家の中に侵入しようとする病魔や災厄を防ぐためのものでした。菖蒲は古来より邪気を祓うものとされており、また、市内ではこの日に屋内の神棚の下にゴザを敷き、その上に蓬・萱・菖蒲を敷き広げ、鍬・鎌・鋤などの農具をきれいに洗って並べ、これを「鍬神様」といって祭りました。この祭りは「農の祭」ともいい、農具に日頃の感謝をするものでした。

古来、中国において鯉は第三の満月に黄河を遡り、勢いをもって天に昇り、龍になると伝えられていました。男の子の未来もこのようにあれとその願いを鯉のぼりに託し空を遊泳させたのでしょう。



【端午の節供　掛軸】

【金太郎】

【鍾馗（しょうき）】

▼博物館レポート

『桂川の水系』～その上流から（前）

はじめに

桂川は相模川水系の最大の源流で、山中湖を水源として梁川（やなびり）を出発してから忍野村で湧水などを加え、鐘山の滝（小佐野の滝）から富士吉田市内に入ります。市内では鐘山の滝から忍野村境に沿って東に進み、下吉田で富士山や河口湖の水を集めて流れる宮川と合流し、大明見の古屋川と小明見の大沢川の合流した小佐野川を合わせて進みます。その後県内を東に進みながら神奈川県に流れ、ここから相模川として丹沢山地の沢水を集めて南下し、川幅を広げながら相模湾に流れ出ます。

【鐘山の滝】

この川は江戸時代以前から農業用水や生活用水などに利用され、そのためこの水をめぐる争いも度々起こりました。一方、雪代（ゆきしろ）と呼ばれる富士山の雪解けによる土石流などによって災害をもたらす川でもありました。

博物館ではこのように市の歴史と深く関わりのある桂川について、関係資料を収集整理しながら研究に役立てられるよう体制を整えるともに、『桂川水系を歩く』と題した歴史散歩講座を開催するなど積極的にアプローチしています。今回のレポートでは桂川及びその水系の歴史、得にその上流について整理しながら前編後編の２回に分け紹介します。富士吉田市民はもとより周辺流域の人々にも欠くことのできない川として生活を支え、それぞれの地域文化を育んでいる桂川の、その存在について再考する機会となれば幸いです。

山中湖と忍野平野

桂川最大の水源である山中湖は、湖面海抜982m面積６km²余と、ともに富士五湖最大で、マリンスポーツや釣りなどのレジャーが盛んな観光地であることは広く知られています。山中湖をはじめとする富士五湖は、富士山の噴火と深い関係があり、天応元年(781) 以降の（『続日本紀』）古代の噴火による溶岩流によって富士山の西と東にあった大きな湖がせき止められ、現在のような湖が形成されたものと考えられます。

西側の湖は「セの海」と呼ばれ、延暦19年(800)以降、貞観６年(864)ごろまでの噴火で湖は次々と分断され（『日本紀略』・『三代実録』）、やがて現在の本栖湖や精進湖、西湖、

【忍野村】

▼博物館レポート『桂川の水系』～その上流から(前)

河口湖が形成されたようです。一方、東の湖は現在の山中湖及び忍野村の平野部一帯にあり、セの海と同様この時期の噴火（鷹丸尾溶岩流）によって分断され、山中湖はそのまま残り忍野一帯は水が干上がり平原になったと考えられています。かつての忍野村は平野部に湿地帯が多かったことや葦が自生していたことからも湖であったことがうかがえ、忍野八海などの湧水もその名残で、このように残った地形は化石湖と呼ばれています。しかし、鷹丸尾溶岩流の噴出時期については山中湖村北畠遺跡から出土した鏡など（松鶴鏡やガラス玉）の年代から12世紀後半以降の可能性があり、山中湖の形成も前に述べた時期より3世紀ほど下がることが考えられ（『富士吉田市史研究第10号』～註１）、このことから古代官道のルートなども含めて（『甲斐路83』～註２）検討が求められています。いずれにしても、富士五湖は富士山の溶岩によって形成されたせき止め湖ですが、他の湖が増水などに悩まされる水のはけ口のない湖であるのに対し、山中湖は唯一桂川というはけ口をもった湖で、その桂川は山中湖と続いていた忍野平野の旧湖の傾斜を通って流れる自然の川として形成されたといえます。

梁尻と川筋

梁尻は山中湖の水のはけ口一帯の地名で、現在東京電力の取水口が設けられています。全国各地に「梁瀬」・「柳瀬」・「矢名瀬」・「屋那瀬」などの地名が見られますが、「梁」が本字で、この梁（ヤナ）とは川魚を捕らえる一種の仕掛けで、川の水を一か所に集めて流すようにした場所や地形にあてられた地名だと考えられており、(『続地名語源辞書』校倉書房)、梁尻も山中湖の水のはけ口として同様の意味から呼ばれるようになったと想像できます。

梁尻から鐘山の滝までの川筋については『甲斐国志』の桂川の項に「源を山中湖の西北岸より発す。其口をヤナ尻と云。小板を架し橋として隣村へ往来す。北流一里余にして忍草村の辰己にてアラハ川（アハラ川ヵ、傍点後加）と会して中の方へ城山の腰を回り鐘ヶ淵に至る」とあり、阿原川と合流して鐘山を回り込む様に流れていることが確認できます。阿原川は「源を内野村承天寺の北原より発し西流して忍草村に至る。此地数所の湧水と合し又西流して桂川に入る此間半里」(『甲斐国志』) と記されている通り、忍野八海の湧水を加え桂川に合流しています。川の水源については、忍野八海と同様に内野でも山中湖村境のヤヘイボリ付近をはじめ各所で湧水が確認できることから、恐らく湧き水と考えられます。

このうち山中湖から忍草までの川筋については、谷村藩主秋元喬朝によって延宝２年（1674）から３年がかりで溶岩の開鑿（かいさく）工事が行われ通水したと言われています（『秋元家甲州郡内治績考』都留市立図書館蔵本。）秋元氏は新倉掘抜などの治水事業や産業振興等、三代にわたって郡内に多大な功績を残しており、資料によるとこの開鑿工事は延長12町（約1.3㎞）におよび、下流域の村々から大勢の人足が出て行われたといいます。事業及び内容については定かではありませんが、農業用水など桂川の水を利用していた近世の村々にとって、最大の水源にである山中湖梁尻の取水口及び以降の川筋の整備は最も重要で、特に土砂等の堆積によって水の流れが変わるのを防ぐための川浚い（瀬浚）や、水量を増やすための掘下げは度々行われていました。史料によるとこれらの整備（普請）は梁尻から川筋に沿って忍草村まで広範囲にわたって行われ、水を必要とする水掛け麦の栽培を主に行っていた富士吉田市域の村々では、旧八ヶ村の内の上暮地村を除く七ヶ村から多くの人足が出ていることが確認できます。このようなことから、上流における水利用に際しては特に厳しい配慮がなされ、幕末の内野村での山中湖からの新規掘割取水（内野用水）に対しては七ヶ村が共に反対したり、明治以降においては無断使用に対する訴訟をおこすなど水への利権を主張していました。

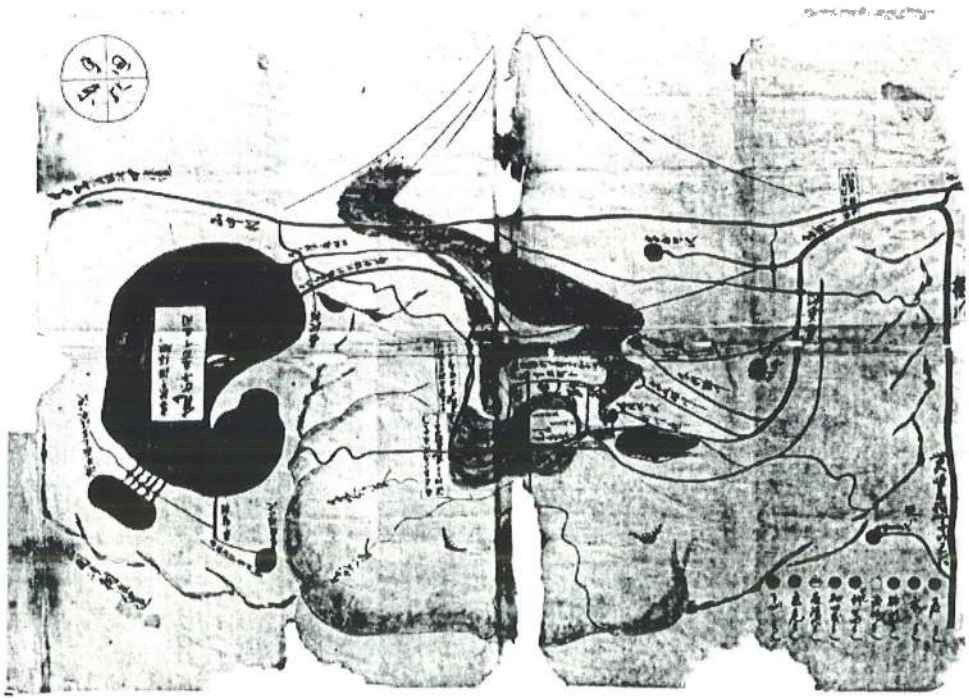
▼博物館レポート『桂川の水系』～その上流から(前)

内野用水

近世における忍野村は内野村と忍草村の二村で構成されており、生業は畑作中心の農業で副業として忍草村では馬の背中に荷物を載せて運ぶ駄賃付けが、内野村では駄賃付けの他に木挽きなど山の仕事で生活を営んでいました。ともに高冷地の寒村で特に内野村は土地が溶岩に覆われ水に恵まれず、水に恵まれた忍草村でも水はけが悪く湿地帯が多かったため、二村とも稲作に適した地域ではありませんでした。しかし、人々の稲作への希望は強く、水を確保して水田を開こうという試みが近世末から始まりました。

畑を田に変更するいわゆる「畑田成」などの水田化は、富士吉田市域ではすでに天保年間頃（1830～43）には始められていましたが、忍野村域ではやや遅れて嘉永年間（1848～53）から試作等が行われました。当初は内野の背後に連なる山々から流れ落ちる沢水を利用して（賀背沢・新名庄沢等）２～３反歩程の畑田成を行い、嘉永３年（1850）には湧水のあった清水ヶ池等の漏れ水を引いて試作していましたが冷水で水量も一定でなく、結局山中湖の水を引くことを計画し代官所へ願い出ました。しかし、山中湖の水は旧来から下流の村々で使用していたため、上流で開田すると水不足になるという理由で反対されました。山中湖の水を富士吉田市域より上流で利用することは以前から計画され、特に山中村が管理していた梁尻「御立林」（幕府直轄林）は梁尻川（桂川）が流れる開発の適所として寛政10年（1798）以降、文化年間（1804～17）にかけて何度となく開発申請が出されましたが、その度に下流の村々の反対で取り下げられてきた経緯があります。

嘉永のこの時期も内野村は下流の村々にお願いし、水不足の迷惑にならないよう梁尻の取水口から離れた場所に水路掘割案を示しましたが、山中湖は新屋・上吉田・松山・下吉田・新倉・大明見・小明見の七ヶ村の溜井であるという理由で同意されず、やむなく嘉永４年には老中阿部伊勢守に直訴するという許されない行動にもでました。また、嘉永５年には溜池を設けて沢から流れ出るわずかな水を貯水して用水に利用する計画があがり、同年９月から内野村南東の祭文司地区に溜井工事が行われましたが、約一ヵ月間ほどで完成



【内野村畑田成試作地絵図面(嘉永年間)】

▼博物館レポート『桂川の水系』～その上流から(前)

した幅40間、横17間、深さ９尺程の溜井も底土が火山灰土のため水が地下に浸透し失敗に終わりました。この間、山中湖から水路を掘割するという当初の計画は平行して進められ、村役人の度重なる折衝が行われました。下流の村々の梁尻掘下普請による水量の増加などもあって、明治４年（1871）３月に至ってようやく水利用の許可を得ることができましたが、水が減った場合は用水を止めることなど細かい条件付でもありました。

念願の下流の村々の同意を得ることはできましたが、実際の水路工事は山中湖長池と内野村の間にある大出山をトンネルで掘り抜いて水を引くもので、多大な労力と資金を必要とする難工事に対して組織化された事業ではなかったため、工事を始めてから約280間程掘り進められた明治15年には中止されました。それでも人々の熱意で明治21年に至り工事の方法や組織を再編し再開、明治30年５月にようやく完成しました。しかし、充分な水を得ることができなかったため、その後何度となく改修工事を行っています。この事業により明治40年代には水田30町歩を越え、以降水田化が急速に進んで稲作を生業の中心とする村に成長していきました。技術の低い時代の難工事を成功させたことは、新倉村が河口湖の水を引いた「新倉掘抜」工事と同様、水を求め止まない先人の熱意そのものであったといえます。なお、この水路は大正12年(1923)の関東大震災で長池からのトンネルが崩落し用水が寸断した際に、山中湖の水利権を獲得しようと計画していた東京電灯株式会社との間で、長池からの取水口を閉鎖しその取水権利を譲る代わりに、梁尻から大出山の裾を回り込む水路を電灯会社で工事し水を保証することが決定し、昭和に入って現在のルートになっています。

【内野用水平面図】

＊次回(後)は、山中湖村と忍野村境にある沖新畑(おきしんぼた)での桂川を利用した開発問題や、山中湖と同様に桂川の水源とされている忍野八海とその信仰、そして鐘ヶ渕発電所や忍野水力発電所などの上流における発電事業と下流域の村々との関係について紹介します。

註(1)櫛原功一『山中湖村北畠遺跡出土の「松鶴鏡・ガラス玉」』

(2)山梨郷土研究会（斉藤泰造）『再び古代甲斐路・ツナ坂越の傍証』)

主な史料及び参考文献：

『富士吉田市史』史料編第３巻（近世）及び第６巻（近・現代）

『山中湖村史』第３巻

『忍野村誌』第１・２巻

『山村と水利』（明治大学法史学研究室）

『甲斐国志』（「甲斐叢書」10～12巻）

<当館学芸員　高村　信>

▼博物館事業

活動報告

博物館講座

歴史散歩

『桂川水系を歩く～その上流から』

平成８年６月９日（日）

昨年度に実施した『桂川水系を歩く』に引き続き、今回は桂川の源流である山中湖を起点として鐘山の滝のある博物館まで約９㎞の道のりを歩きました。当日は時折小雨が降っていたにもかかわらず、多くの人々が参加し、道々の途中では講師に迎えた渡辺栄吉氏（山梨郷土研究会々員）の説明を聞きながら桂川に関する歴史を学びました。

【忍野八海にて】

体験学習

『縄文土器作り教室』

平成８年７月28日・８月４日・18日（日）

この講座は実際の土器作りを通して歴史に対する理解と関心を深めてもらうことを目的としています。今回は計３回の日程で粘土練り、成形及び文様付け、野焼きの各工程を行い、縄文土器を完成させました。参加者は自分で選んだ土器をモデルに時間の経つのも忘れてそれぞれ力作を作りあげました。最終日の野焼きでは誰ひとり割れる作品はなく、大成功に終わりました。

【土器に文様を付ける】

書籍整理、進行中

博物館の活動の一つに資料の保存があります。これは市民の方々から寄贈された歴史や民俗などに関する貴重な資料を、後世まで永く保存し伝えることを目的としていますが、単に収蔵庫に保管するのではなく、資料の形態や使われた背景などを細かく調査して写真撮りし、材質や分野ごとに整理して一定の温度や湿度のもとに管理するものです。博物館では開館以来、富士山信仰や織物関係、そして土器から農具まで、あらゆる実物資料を収集し、調査・整理しながら保存しています。文献関係では古文書の所蔵家別の整理作業がほぼ終了し、現在は主に書籍を整理しています。書籍は１冊ごとにタイトル・著者名・発行年月日など必要事項を調べて目録にし、整理番号を付けて封筒に入れて保存しますが、書籍は江戸時代から明治時代にかけて発行されたものがほとんどで、難解な文字や虫食いなどでボロボロになったものもあり、作業は時間をかけて慎重に行わなければなりません。これまで約１万点ほどが終了し、貴重な医学書を集めた桑原文庫もボックスファイルの形式で収蔵庫に保管しています。しかし、まだ未整理の書籍がほとんどで、最終的には恐らく２～３万冊は下らない数になる書籍と、引き続きホコリと臭い匂いに悩まされながらお付き合いすることになりそうです。

▼博物館から

お知らせ

次回の企画展

『渡辺雪峰の世界』

平成８年10月12日(土) ～12月15日(日)

郷土が生んだ近代文人画家である渡辺雪峰はその画業に高い評価を得ています。この展示では館収蔵の下絵(市指定文化財)を中心に展示し、雪峰の知られざる一面を紹介します。

博物館実習

８月16日(金)から29日(木)までの２週間、当館において２大学６名の博物館実習生が学芸員資格取得のために学んでいきました。

・都留文科大学－杉山佳正、高橋俊吉、馬場千恵、武藤亜子、白須里美
・皇學館大学－田邉将之

インターネット

富士吉田市が開設しているホームページで博物館の情報を紹介しています。アクセスしてみてください。

富士吉田市ホームページＵＲＬ
http:／／www.city.fujiyoshida.yamanashi.jp／rekishi／rekishi.html

編集後記

昨今、カラスによる被害がニュースなどで度々取り上げられています。当館のエリア内にもたくさんのカラスたちを見かけます。このカラスたち、困ったことに屋外展示物である農家や御師の家の赤外線警備システムに度々ひっかかってしまいます。その度に異常侵入を感知した警備会社が駆けつけるという事態の繰り返しです。糸を張ったり他の鳥の模型を吊るなどしていますが、あまり効果ありません。しかしながら、カラスがいるおかげで実験栽培している雑穀を食い荒らすスズメが近寄らないので豊かな収穫が望めます。警備会社には大変申し訳なく思っています。 (FU)

ご案内

開館時間　午前9：30～午後5：00(入館は午後4：30まで)
休 館 日　月曜日(祝日を除く)
祝日の翌日(日曜・祝日を除く)
12月28日～翌1月3日
観 覧 料

大　人	300円(240円)
小中高生	150円(120円)

( )内は20名以上の団体料金

交通案内
●中央自動車道河口湖ＩＣより車10分
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車。

富士吉田市歴史民俗博物館
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY
〒403 山梨県富士吉田市上吉田2288-1
0555-24-2411　FAX0555-24-4665
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403

発行　平成8年9月30日